『アルマンス』のサディズム

下　川　　茂

作者が主人公にあまりに自己を投影し過ぎると、作者から独立した主人公の生の物語としての自由を小説は失い、作者の自己主張の場と化してしまう。『アルマンス』執筆時四十歳を越えていたスタンダールはこのことを良く知っていた。彼は若年時から文学について理論的研鑽を重ね、音楽・美術・文学に関する著作、旅行記等を既に発表し、そこには短編小説とみなせる逸話が数多く含まれている。『アルマンス』はスタンダールの長編小説第一作だが、作者は決して小説の初心者ではない。

しかし、『アルマンス』の作者の現実拒否の思いと、自己を投影した主人公の全てを肯定したいという願望はあまりに強く、しばしば作者は主人公との距離を見失い、自己陶酔の歌を歌い始める。作品結末のオクターヴの死の場面は、多くの論者によって、美しい、詩的なフィナーレとして高く評価されているが、私見によれば、最も露骨な自己陶酔の歌に過ぎない。そして、そこにはサドの姿が現れる。スタンダール小説におけるサドの影響を論じる研究者は、イタリア年代記の諸作品と『ラミエル』を取上げることが多いが、スタンダールが最もサドに近付いたのは処女長編『アルマンス』においてではないだろうか。

1　オクターヴの幸福な死

『アルマンス』最終章の冒頭近くに以下のような箇所がある。

> アルマンスの心変わり以来、人間は彼にとって無縁の存在となっていた。美徳の不幸も、悪徳の栄えも何ものも彼の心を動かすことはできなかった。密かな声が彼に言うのだ、「あの不幸な人々はお前ほど不幸ではない」と[1)]。

GF-Flammarion 版『アルマンス』の編者 Labia が序文で指摘しているように[2)]、「悪徳の栄え la prospérité du crime」はサドの小説『ジュスティーヌあるいは美徳の不幸 *Justine ou les Malheurs de la vertu*』の表題下の銘句の中に存在する[3)]。「美徳の不幸 les malheurs de la vertu」は表題そのものに含まれている。これらがサドの小説を示唆していることは間違いない。しかし Labia は、オクターヴが善悪の境界を越えて、ニヒリズムの境地に達し、不可能な愛と死の旅に出発すると指摘するだけで、サド小説とオクターヴの死の関連を具体的に追求してはいない。

自らを最も不幸な人間と考えて自殺するオクターヴは男性版ジュスティーヌなのだろうか？『ジュスティーヌ』は「いたるところで悪徳が勝利し、美徳がその犠牲となる」(129) ことを示す。オクターヴの「美徳 vertu」は「断固たる farouche」(173) ものであり、彼は二人の悪人が偽造した

アルマンスの手紙に騙される犠牲者だから、オクターヴをジュスティーヌ同様、悪徳の犠牲となる美徳の体現者とみなせないことはない。しかし、無神論者のオクターヴと違って、ジュスティーヌは自殺の誘惑をキリスト教信仰によってしりぞける。

> (……) 生きるのを止めようと思いました (……) 威厳に満ちた神聖なお方は (……) あの恐ろしい瞬間に私の魂を天上の喜びで満たし、そのため、おそらく私は自殺することがなかったのです。ああ、私の保護者、導き手よ、あなたの好意を、あなたの慈悲を希います。私の不幸、私の諦念と祈りを見そなわせたまえ (173)。

そして信仰者ジュスティーヌは「私よりもっと同情すべき人がいる」(285) と考える。オクターヴは、彼を襲った最初の大きな不幸に際して、「あの不幸な人々はお前ほど不幸ではない」と考え、「自ら準備した阿片とジギタリスの混合物」(261) を飲んで自殺する。功利主義思想の持ち主で、有徳の無神論者オクターヴの、「アルマンスを自由に」し、「自らの眼から見て卑怯者」(260) にならないための死を、平静な曇りのないものとする論者は多い。例えば、Philippe Berthier は、プレイアード新版のスタンダール小説全集の作品紹介で、『アルマンス』のフィナーレについて、「甘美 douceur、微笑、単純、晴朗、そして音楽」のみの世界と評している[4)]。

しかし、オクターヴの幸福な死は、本当に「単純、晴朗」なものだろうか。私の印象は全く違っている。死体となったオクターヴの唇に浮かぶ「微笑 le sourire」は私にはナルシシズムの極致としか思えない[5)]。それだけではない。作者のナルシシズムが生み出したオクターヴの「甘美」な死を、『ジュスティーヌ』のサディストの一人、ロランの奇妙な性的実験と比べてみよう。

> (……) テレーズ、私を待っているのは絞首刑の縄 la corde だ (……) 私は確信しているが (……) この死は残酷どころか限りなく甘美な douce ものだ (……) その感覚を私自身の体で知りたい。首を締められる者は、それにより、勃起神経が射精へと導かれることが大いにありうることでないかどうか、自分の経験で知りたいのだ。こういう死が遊びに過ぎないと確信すれば、もっと勇敢に絞首刑に立ち向かうことができるだろう (……) (339)。

以下がジュスティーヌが語るロランの実験の結果である。

> (……) ロランが信じたことは全く本当でした。彼の顔に描かれたのは快楽の徴だけでした。そして、ほぼ同時に、精液が丸天井に向かって何度も勢い良く飛びました。(……) 私は彼の身を解きに駆けつけました。彼は気絶していましたが、私の十分な世話で、息を吹き返しました (340)。

オクターヴの死の場面を見よう。

> そして、三月三日の真夜中、カロス山の背後に月が昇るころ、自ら準備した阿片とジギタリスの混合物は、静かに doucement オクターヴを彼にとってかくも波乱に満ちた生から解き放った。夜明け、人々は、甲板の綱具 cordages の上に横たわって動かぬ彼を見つけた。微笑が唇に

浮かび、彼の類稀な美貌は、死体を屍衣に包む水夫たちまで感動させた。彼の死因をフランスで疑ったのは、アルマンスただ一人だった（261 – 262）。

オクターヴは「静かに」、苦痛なく、「最も優しい愛の魅惑のもと sous le charme de l'amour le plus tendre」（261）で死に、その死体は「甲板の綱具 cordages の上に横たわ」り、「微笑が唇に浮か」んでいる。ロランの「快楽」は肉体的・感覚的であり、不能者オクターヴの「優しい恋」はどこまでも精神的である。又、ロランは生き返り、オクターヴが死ぬという点も両者は違う。しかし、ロランもオクターヴも自殺を試み、その死の場面には縄あるいは綱具が登場し、そして、死の瞬間に二人とも極めて大きな幸福を感じる。「断固たる」「美徳」をそなえたオクターヴにはサド的、あるいはサディスト的側面があるのではないだろうか？

スタンダールのサディスト的側面については慎重な立場を取る論者が多い。例えば、Michel Crouzet は次のように書いている。

これがイタリア的短刀の一撃の複雑な存在様態だ（……）もちろんスタンダール的「サディズム」は問題にならない。作者の「無意識」を参照することにたいした利点はないし、スタンダール的「エネルギー」は明確にサディスト的要素を拒否している。さらに、スタンダール的暴力を「心的 psychiques」用語で描くことは、最も重要なのが暴力の措辞であることを無視することになる[6)]。

私は Crouzet と違って、サディスト的要素はスタンダール的「エネルギー」の中で重要な位置を占めるし、Crouzet のように「暴力の措辞 la diction de la violence」を過大評価して、作者の無意識を無視することに「たいした利点はない」と考える。

Philippe Berthier はスタンダールのサディスト的側面を無視しないが、その限界を指摘している。

スタンダールは恋のこの地獄的裏面を知らないわけではない（……）しかし、彼が心惹かれるのは、この激しい、苛烈なドンファン主義ではない。この強烈な、しかし乾いた土地に彼は自発的に住もうとはしない。自らを猛獣とみなし、ピクピクと動く無数の獲物を意のままにできるようになれたらと夢想したことはある。彼はウェルテルの一族であり（そのことを自覚していた）、日陰のメランコリックな甘美さの方を獲物よりも好んだ（そうせざるを得なかったことが多かったが）[7)]。

確かにスタンダールは完全なサディストだったことは恐らく一度もない。しかし、Berthier が考えている以上に頻繁に「この強烈な、しかし乾いた土地」を彼は訪れたのではないだろうか。愛する女性に棄てられる、あるいは拒否される度に、その女性を「意のままにする」欲望を感じなかっただろうか？「激しい、苛烈なドンファン主義」、すなわちサディズムは、このメランコリックな愛の夢想家の心を幾度もとらえたように思われる。オクターヴに戻ろう。

2　オクターヴのサディズム

Crouzet が指摘しているように、オクターヴは「暴力の主人公 le héros de la violence」である[8)]。しかし、クルゼの主張と違って、常に自らに向けられるものでも、常に抑制されたものでもない[9)]。なぜなら、「こういう絶望の発作にオクターヴがとらえられるのは、常に夜一人の時とは限らなかった。そういう時には、極度の暴力、異常な意地悪さが彼の行動の全てに現れた（……）」（71）のだから。その「優雅な物腰」と「完璧な節度」（71）にもかかわらず、オクターヴは他者に対してしばしば暴力を振う。召使を窓から放り出し（72）、兵士と喧嘩し（73）、クレヴロッシュ侯爵と決闘する（189）。オクターヴの暴力を詳しく見てみよう。

オクターヴは、「彼の顔つきに恐れをなし」、「通行を妨げるような様子」（72）を見せた召使をどなりつけ、窓から放り出す。「召使は庭の夾竹桃の鉢の上に落ち、たいした怪我ではなかった」と、語り手は主人公の暴力が読者に与える印象を弱めようとしている。しかし、その一方で、「とりわけオクターヴの母を震え上がらせたのは、オクターヴが翌日になってやっと自らの行為を悔いたことであった。悔恨の思いは激しいものではあったが。」（72）と、オクターヴが暴力行為の前後に善悪の境界を越えることを強調している。彼は冷酷なサディストではないが、狂乱状態に陥ると、他者を挑発し、善悪を忘れ、暴力を振るい、善悪の観念を取戻すのに時間がかかる。

兵士との喧嘩の際も、「とても腹が立っていたんです。笑いながら僕を見ていた兵士たちに喧嘩をふっかけました」（73）と、挑発するのは彼の方である。語り手はここでは、「彼はサーベルで三ヶ所傷を受けたが、実のところたいして危険な傷ではなかった」（73）として、オクターヴ自身が傷ついたことにし、しかも「たいして危険な傷ではなかった」と、オクターヴの行為の重大性をぼかしている。兵士の方に死傷者は出なかったのだろうか？この事件に関しては、語り手はオクターヴの悔恨を問題にすることさえしない。母親にもオクターヴは「自業自得です」（73）と言うだけだ。ただしアルマンスには事件の細部を物語ったことになっている（73）。そして「永遠の後悔の種」（73）を抱え込む心配を彼女に訴える。しかし、彼は本当に自らの暴力行為の結果を心配しているのだろうか？

クレヴロッシュ侯爵との決闘の際、オクターヴは侯爵を冷酷に撃ち殺す。

> 彼は撃った。クレヴロッシュ氏は倒れ、二分後に死んだ。（……）「自惚れ屋が一人減っただけです」と冷たくオクターヴは言った（189）。

オクターヴに決闘を強いたのは、ドーマール夫人をめぐるライヴァルである侯爵の手紙だが（185－186）、この手紙はイタリア座でのオクターヴの無作法を咎めるものである。彼の無作法が「許される限度を少し越えていた」（185）ことは語り手も認めている。従って、決闘のきっかけを作ったのはオクターヴの方である。さらに、決闘が始まって、両者が傷ついた段階で立会人が中止を求めても、オクターヴは中止に反対し（188）、侯爵と立会人の心理を操って決闘を続行し、その結果侯爵は死ぬことになる。このとき、恋をしないという誓いを破ってアルマンスを愛したオクターヴは「恐ろしい、希望のない不幸」（160）に陥っており、アルマンスに迷惑をかけないために自殺することもできない（163）。そのため、自殺ではない決闘による「死は彼にとって最上の幸福」（187）であった。死ぬこ

とが目的の決闘だから、たとえ相手の死を引き起こすことになっても、中断することはできない。さらに作者は、負傷した主人公がアルマンスの側で生きる可能性を想定している。

> この負傷は彼を数日母のもとに引き止めることになるだろう、そうなれば、アルマンスとそう遠くないところにいられるわけだが、この負傷にもとづいて、よくわからないが何かしら漠然とした罪深い希望を彼は抱いていたのだ。十五分後、ついに、かんかんに怒ったクレヴロッシュ氏と誰よりも幸福なオクターヴは、再度ピストルに弾丸を装填することを許された（188）。

この「漠然とした罪深い希望」とは一体なんのことだろうか？オクターヴはアルマンスのもとを離れると決めている。その決断を守らず、アルマンスの側で彼女を愛し続けることが「罪深い希望」なのだろうか。オクターヴは既に腿を撃たれて負傷しており、語り手の言うように、それによって「アルマンスとそう遠くないところにいられる」。もし、それが「罪深い希望」なら、これ以上決闘を続ける必要はない筈である。それとも、決闘を続行し、致命傷を負うことが「罪深い希望」なのだろうか。いずれにせよオクターヴは、「少しも私は弱っていません。ここに着いたときと同じくらい力があります。どんなことでも終らせるんです。どうしてこの決闘を終らせないんです？」（188）と立会人に語って、決闘の続行を主張し、決闘は続けられる。オクターヴは、たとえ人を一人殺しても、あるいは自ら殺される危険を冒しても、その「力」を発揮せずにはいられない。二度目も後手だった彼は、先手の侯爵に右腕を撃たれるが、致命傷とはならず、冷静に傷の手当てをしてから、相手を撃ち殺す。必要もないのにオクターヴに侯爵を殺させる作者は、どうしてもこの世から「自惚れ屋」を一人減らしたいらしい。オクターヴの後悔は何日もたってから次のような形で現われる。

> あの可哀想なクレヴロッシュ侯爵は見事な犬を一匹飼っていたが、彼にとてもなついているようだった。主人がいなくなってから、あの可哀想な犬が放置されてるんじゃないかと心配だ。ヴォレップが密猟者に変装して、あの見事なポインターを買に行くことはできないかな？せめて大事に扱われていると確信できたらと思う。あの犬を見たい。いずれにせよ、あの犬は君にあげるよ（202）。

しかし、このオクターヴの「心配」は後悔の徴と言えるだろうか。必要もないのに人殺しをしたことを本当に彼が後悔しているとは思えない[10)]。アルマンスの反応は描かれず、クレヴロッシュの犬はここにしか登場しないが、自分が殺した人物の飼っていた犬を恋人に贈るという発想自体不可解で、後述するアルマンスに対する敵意が感じられる。あまりに無造作に「自惚れ屋」を殺したことを、作者は後ろめたく思っているのだろうか。このあともう一度、作者はクレヴロッシュの死を取上げる。

> そしてドーマール夫人は、誰の目にもそう見えたが、オクターヴが熱の原因である傷を受けたのは彼女のためであったことをよく思い出しているようだった。クレヴロッシュ侯爵の命を奪うことになったこの事件のことを思い出させるのは実に悪趣味だったが、夫人はしばしばこの事件に触れずにはいられなかった（222）。

しかし、ここでも「クレヴロッシュ侯爵の命」はドーマール夫人の「悪趣味」をあげつらうために言及されているだけである。公爵を「自惚れ屋」(185、189)・「馬鹿者」(188) にし、オクターヴを「恐ろしい、希望のない不幸」に置くことで、作者は彼の殺人の犯罪性を隠蔽している。オクターヴは慢性のサディストではないが、十分にサディスト的行為を犯しうる人物である。

アルマンス宛の手紙と遺書を「自分の血で書くという子供じみたまね」(190) をサディスト的行為に数えることはできるだろうか？作者はインクがなかったことにして (190) オクターヴの行為を合理化し、さらに「子供じみたまね」と呼んで、血で書かれた手紙が読者に与える陰惨な印象を弱めている。しかし、アルマンスが受けた印象は全く違う。手紙を読んだ彼女は気力をすっかり失い (193)、さらに、傷ついたオクターヴの姿を見て窓辺に倒れ、「狂気に近い」(195) 状態に陥る。血で書かれた手紙と遺書の目的は、アルマンスをこのような状態に陥れることではなかったか。

ドーマール夫人によってアルマンスに対する愛を自覚させられたところまで、作品を遡ってみよう。夫人の言葉は「彼を幸福の絶頂から、恐ろしい、希望のない不幸へと転落させ」(160) る。作者が語るオクターヴの最初の反応は以下のようなものである。

> あれほど何度も誓ったことを、心弱くも破ったのだ！一瞬で生涯の努力を覆してしまった。自尊心 sa propre estime に対するあらゆる権利を失ったところだった (161)。

「希望のない不幸」に陥ったオクターヴが最初に意識するのはアルマンスではなく、「自尊心に対するあらゆる権利」である。決闘後も、「誓を破ったことで幾分自らを責めた。自尊心が少し弱まった il s'estimait un peu moins」(203) と、彼の自尊心は「少し弱まった」だけである。「自尊心」には「傲慢」の意もある orgueil がしばしば用いられ、自尊心＝傲慢 orgueil からオクターヴが解放されることは決してない (69、75、120、135、165、175、203)。アルマンスも自尊心の強い女性である。

> マリヴェール夫人は姪の答えの底にある、苛立ちと傷つけられた誇りに気がついた。その夜、ボニヴェ夫人の邸で、彼女が観察したところによると、息子を前にしても、ゾヒロフ嬢の悲しげな様子は少しもなくならない。それは、愛する者に対して、十分に自尊心 orgueil を見せなかったのでは、そしてそのためにたぶん愛する者の尊敬を失ったのではという心配が原因だった (135)。

Geroges Blin はオクターヴとアルマンスの自尊心について書いている。

> 自尊心 orgueil の達人は皆そうだが、本物の迫害妄想とまでいかなくとも、生理的欠陥のせいでオクターヴは誰よりも劣等感に苛まれている。同じように誇り高いアルマンスも同じ病に苦しんでいる。これだけ強烈な二つの自尊心 amours-propres は、互いに、誤解し、衝突し合うことしかできない。「自尊心の傷」による興奮から生じた誤解と衝突が交互に生じることで小説全体が成り立っている [11)]。

自尊心の戦いに関して、オクターヴとアルマンスは『赤と黒』のジュリアンとマチルドを予告しているが、ここではオクターヴの自尊心に注目する。男性の自尊心について『恋愛論』に次のような

記述がある。

> 地獄的自尊心 orgueil、アルフィエリ風の自尊心 orgueil の犠牲者、道具となってしまった男がいる。彼らは恐らく残酷だ。なぜなら、ネロ同様、あらゆる人間を自分の心によって判断しているので、常に恐れているから。自尊心を最大限享受できない限り、すなわち、快楽の伴侶に残虐行為を行わぬ限り、彼らは肉体的快楽を得ることができない。『ジュスティーヌ』のおぞましい行為の数々はこれが原因だ。この種の男たちはそれなくしては安心できないのだ[12)]。

女性の自尊心 orgueil についても『恋愛論』で詳しく論じられている。

> (……) 自分が自尊心 orgueil を示すことができるのは小事に関してでしかないこと、あるいは感情によってのみ重要となることがら、第三者には分からないことがらに関してだけであることに女性は気づく。運命によって置かれた地位の低さと魂の気高さの悲しい対照に苦しむ女性は、自らの自尊心 orgueil を尊重させるために、自尊心を熱狂的に高め、その判決を頑なに守ろうとする。(……) 高邁な性格の女性は恋人のために何度でも自らの命を犠牲にするだろう。しかも、自尊心 orgueil の諍い、それも扉を開けるか閉めるかというような諍いから恋人と一生喧嘩別れする[13)]。

「陰鬱なアルフィエリ」(68) の読者オクターヴは、「アルマンスがいつも恐かった。彼女に近づくときには自分の運命の支配者の前に出ると感じないではいられなかった」(257) とされている。「運命の支配者」に自尊心を傷つけられた時、どんな態度をオクターヴは取ったか？

「自尊心に対するあらゆる権利」を失ったと感じたオクターヴは「アルマンスから離れ、二度と彼女に会うことを自分に許さない」(165) と決心する。しかし彼女に会わずにはいられない。作者が彼女に会わせずにはいられない。

> 本能的な衝動が彼を城の方へ急がせた。(……) 一人でいることが絶え難いので城へ戻ることにしたのだが、それを正当化するために、誰か召使がパリからやって来て、サン・ドミニック通りの家に彼がいなかったと言って、彼の狂気沙汰が知られることになり、母に心配をかけるかもしれないと考えた (167)。

主人公の「正当化」が口実に過ぎないことに作者は自覚的である。しかし、「とうとう庭の小さな門から城に戻ったが、最初に彼が出会った人物、それはアルマンスだった」(168) という、主人公とアルマンスの出会いは、作者の願望が半ば無意識に生み出したものだ。『アルマンス』執筆当時、作者の自尊心を深く傷つけた女性がいた(それが誰であるかは後述)。オクターヴとアルマンスの出会いは、アルマンスに投影されたその女性をオクターヴに苦しめさせるためである。主人公は作者の復讐の代理者である。サディストのような肉体的残虐行為によってではないが、オクターヴは言葉による残虐行為によってアルマンスを苛む。

> お嬢さん、と彼は氷のように冷やかな様子で答えた。私に対する関心というものは、私から

あらゆる自由を奪うものなので、私がそれに対して心を動かされなくても、お許し願いたい。確かに、私はパリから来て、私の服は濡れている。これであなたの好奇心に十分でないなら、もっと詳しくご説明するが……ここでオクターヴの残酷さは思わず停止した（168）。

「死人のように蒼ざめた」（168）アルマンスは、「よろめき」「今にも倒れそうにな」（168）る。彼女はオクターヴを「死にそうな眼で見」（168）る。しかし、オクターヴは「かなり乱暴に彼女の手を取り」（169）、城へ向かって歩き出す。口調は変わるが、オクターヴはアルマンスに対する愛情を否定し続け、その結果、アルマンスは「あらゆる感情を失って」（すなわち気絶して）「倒れる」（169）。オクターヴの「残酷さ」の目的は、「アルマンスの評判を危うく」（161）しないようにすること、「アルマンスに迷惑を」（163）かけないことである。この目的と、そのための「残酷さ」の必要、それを行うオクターヴのアルマンスへの愛を、作者は決して疑問視しない。ここで作者と主人公は完全に一体化している。気絶したアルマンスの手に思わずオクターヴが接吻すると、作者は「もしアルマンスが気づいたら、彼の残酷な言葉は全て無駄になっていただろう」（170）と語る。オクターヴの「氷のように冷やかな様子」・「残酷な言葉」は「義務」（167）であり、アルマンスを愛しているにもかかわらず、彼女のためにこの「義務」を遂行するオクターヴは有徳の善人である。オクターヴも作者もそう考えている。

しかし、オクターヴの残酷な行為は、本当にアルマンスの評判に対する配慮に由来するものだろうか？そもそも、アルマンスに出会うことが分かりきっている城になぜ彼は戻るのか？作者は「本能的な衝動」としか語らず、「狂気沙汰」を隠し、「母親に心配をかける」かもしれないことをオクターヴは城に戻る理由にしているが、その母親を彼はもう愛してはいない（165、182）。会うことが分かりきっているアルマンスにどんな態度を取るつもりなのか？アルマンスの評判を守るために、残酷な言葉で彼女に愛を否定する必要が一体どこにあるのか？

アルマンスに出会う直前、オクターヴは鳥猟をする子供に誤って撃たれて死ぬことを夢想するが（167）、その直後に出会ったアルマンスは「鳥のように優美で軽やかだった」（168）とされている。鳥のように撃たれて死ぬという「ロマネスクな希望」（167 – 168）を抱いたオクターヴは、次の瞬間、「鳥のように優美で軽やか」な、しかし、彼が「自尊心に対するあらゆる権利」を失う原因となったアルマンスを、殺しはしないとしても、少なくとも捕え、苦しめる猟師となる。オクターヴはアルマンスに対する言葉による自らの残虐行為に無意識で、彼にその責任を負わせることはできないが、この場面を案出した作者にその責任を問うことはできるだろう。『ラミエル』にも鳥が登場するサディスト的な場面があるが[14]、作品の深層を探ると、この場面の方がよりサディスト的である。恐らく作者は、ここで発揮している自身のサディズムを完全には意識していない。しかし、これまで取上げた細部は、皆、彼がサディズムの魅惑にとらえられつつこの場面を描いたことを示している。

作者は、精神的にではあるが、アルマンスを、苛酷に、残酷に苦しめ、ついに気絶するところまで追いつめる。そして、主人公と一体化して、アルマンスの「簡素な朝の服の下にあらわになった、繊細な肉体のまれにみる美しさ」（169）をじっと見つめ、「凍ったように冷たい手を接吻で覆」（169）う。「この日はじめてアルマンスが身につけた小さなダイヤの十字架に気がついた」（169）と、冒瀆的要素も欠けてはいない。全ては有徳なオクターヴの背後に隠されているが、作者のサディズムはテキストの細部に明らかである。数ヶ月後、オクターヴは同じ場所でアルマンスと会うが、作者は、「顔色の蒼さを除くと、彼女は、以前オクターヴへの愛から気分が悪くなった日とほぼ同じくらい美

しかった」(210) と書く。これは、彼に苛酷に苦しめられ、蒼ざめ、気絶したアルマンスの方が、今や「女性の自尊心 orgueil」を取戻し、彼女に接吻しようとしたオクターヴの「軽はずみ」(211) に怒るアルマンスよりも、オクターヴにとって（そして作者にとって）より美しい、ということに他ならない[15]。死の模擬行為である気絶によってアルマンスはより美しくなる。死んだアルマンスの方が生きたアルマンスより美しい。言葉による残虐行為の結果は、肉体的残虐行為同様致命的である。

アルマンスは、オクターヴの秘密について、殺人を想像するが (246)、そのとき、彼女は、そして作者も、彼がクレヴロシュ侯爵を、必要もなく、後悔もなく殺したことを忘れている。アルマンスはオクターヴに、「あなたが私を恐がらなくなってくれるように、あなたの罪と同じ罪を犯そうと思う時があるわ」(258) と言う。オクターヴとアルマンスは、最後のスタンダール小説『ラミエル』の犯罪者カップル、ヴァルベルとラミエルを既に予告している。

『アルマンス』の全体をサド小説的とみなすことはできないが、作者の恋愛心理の深部に隠されたサディスト的側面が発動するとき、サド小説的要素がそこに現れる。作者はしばしばアルマンスを苦しめる。二度彼女はオクターヴのために気絶させられ (169、195)、スービラーヌの「恐ろしい笑い」(230) に打ちのめされ、偽手紙のエピソードの後では、「暗い気持の」のオクターヴは「狂気に近い」「荒々しい態度」(257) で彼女に接する。

しかし、相手に性的快楽を享受させるという幸福を知らない真のサディストと違って、オクターヴは「彼の若い妻の幸福に」「感動」し、「幸福に酔いしれ、彼の腕の中でぼっとなった *se pâmant*」アルマンスは「神々しい美しさ」(260) を彼に見せる。作者は「ぼっとなった *se pâmant*」の部分をイタリックにして、アルマンスの性的快楽を強調している[16]。オクターヴはアルマンスの心変わりを思い出し、「この残酷な確信」(260) によって彼女の「神々しい美しさ」を忘れるが、その後もアルマンスを愛し続ける。

> この最後のときほど、オクターヴが最も優しい愛の魅惑のもとにあったことはなかった(261)。

オクターヴはアルマンスを「最も優しい愛」で愛しているが、アルマンスが自分を愛していないと確信している。この愛は、相手から愛される希望のない愛、しかも、性的快楽を味わった相手の「神々しい美しさ」を忘れた愛である。オクターヴの、一見、純粋に精神的で、見返りを求めぬ高邁な愛は、サド小説のサディストの「孤立した享楽 jouissances isolées」[17]、「孤立した快楽 plaisirs isolés」[18]、「孤独な淫楽 lubricités solitaires」[19] に大変良く似ている。違いは、サディストの快楽が肉体的であるのに対して、オクターヴのそれが精神的であることだけである。両者の共通点は極度のナルシシズム、エゴイズムである。オクターヴ＝作者のナルシシズムは単なるナルシシズムではない。サディズムを秘めたナルシシズムである。死せるオクターヴの「微笑」は「単純」でも「晴朗」でもない。『アルマンス』のフィナーレに流れている音楽は、読者＝他者を不安にする不気味な「音楽」である。

3　サディストの幸福な死

再度オクターヴの死を検討しよう。毒を飲む前に、彼は「致命的な病」(260) にかかったふりをす

る。そして、奇妙な条項を含む遺書に署名する。それから、「最も優しい愛の魅惑のもとで」、アルマンスに手紙を書くが、そこで彼は、「自分の死の死因を除いて」(261)、全てを打ち明け、その手紙に、自らの秘密の告白の手紙と偽手紙を同封する。しかし彼はまだ死なない。「一週間以上」(261) 衰弱を続け、その間毎日アルマンスに手紙を書き続ける。この長い詐病を経て「ギリシャの陸地」(261) を前に彼は服毒自殺する。サドのサディスト、ロランは、上記のように、実験的に首を吊った後、蘇生する。善良なジュスティーヌが、ロランの要求通り、彼の射精後、直ちに助ける。一方、アルマンスから遠く離れたオクターヴは、服毒後アルマンスに助けられることなく死ぬ。しかし、詐病の間彼が味わう「最も優しい愛」は「一週間以上」続くのに対して、ロランの射精はほんの一瞬に過ぎない。この後、悪人ロランはジュスティーヌを苛酷に扱い続けるが、なぜか、繰り返される脅しにもかかわらず、彼女を殺さない。オクターヴの方は、「最も優しい愛」にもかかわらず、「彼の死後二十ヵ月以内に彼女が再婚するという奇妙な条件」(261) のもとに、その自由にできる財産の全てを彼女に遺す。この「奇妙な条件」は、心変わりして彼を裏切ったアルマンスに対する、底意地の悪い復讐ではないだろうか？偽手紙を手紙に同封したことも復讐によって説明できる。この偽手紙はアルマンスの心変わりの唯一の証拠だが、これを送りつけることで、手紙には書かなかった「自分の死の原因」が彼女の心変わりであり、彼の死が病死ではなく自殺であることを彼女に示唆しようとしたのではないか？「最も優しい愛」にもかかわらず、アルマンスに対する復讐は完成する。計画通り、「彼の死因をフランスで疑ったのは、アルマンスただ一人だった」(262) と、アルマンスはオクターヴの死因を疑い、オクターヴの父の死後、現世を諦め、オクターヴの母と修道院に入る(262)。狩人は誤たず的を射た。オクターヴの死は、彼の父の現実の死を招いただけではなく、母とアルマンスの象徴的な死をも引き起こした。ナルシストでサディストのオクターヴは彼の家族全員の現世からの消滅の責任者である。

Gilbert D. Chaitin は、オクターヴのアルマンスに対する破滅的復讐の背後に、スタンダールのクレマンティーヌ・キュリアルに対する復讐を読み取っている[20]。『アルマンス』執筆時にクレマンティーヌに捨てられ、絶望したスタンダールは、自分の中のサディスト的傾向をオクターヴに投影した。そして、アルマンスにはクレマンティーヌを投影し、オクターヴにクレマンティーヌに対する復讐を代行させた。そしてアルマンスには、クレマンティーヌだけではなく、スタンダールが愛し、そして何らかの理由で彼から離れていった（その中には産褥に死んだ母も含まれる）全ての女性が含まれている[21]。

4　モーツアルト的ドン・ジュアン

多くの論者がオクターヴのサディスト的暴力を見逃したのは、「不幸な秘密」(254) とそれによる「絶望の発作」(71) によって作者がそれを正当化しているためだろう。例えば Béatrice Didier は、『スタンダール事典』の「サド」の項目を担当しているが、そこでは『アルマンス』を取上げず[22]、別の著書で、『アルマンス』に現れる「リベルタン小説」に言及するときには、サドを取上げない[23]。

スタンダールが『恋愛論』で次のように書いて、ドン・ジュアンよりウェルテルの方が好ましいと明確に宣言していることも、オクターヴとその作者にサディスト的傾向を見ることを妨げてきた。

（……）ウェルテル的人間の方がより幸福だと思う（……）正義を行う習慣は（……）幸福にいたる最も確実な道であり、ウェルテル的人間は悪人ではない[24]。

残虐は病んだ共感である[25]。

しかし、ウェルテルをより幸福と考えてはいても、愛されないことに大いに苦しんだスタンダールは、しばしば女性を憎んだ。そのとき、彼はサドに近づく。

もちろんスタンダールを真のドン・ジュアン、真のサディストとみなすことはできない。

真のドン・ジュアンは女性を最後には敵とみなし、そのあらゆる不幸を楽しむようになる[26]。

スタンダールとその主人公は、女性を「敵とみな」すことがあっても、「そのあらゆる不幸を楽しむ」ところまではいかない。彼らは自尊心が強いが、「地獄的自尊心、アルフィエリ風の自尊心の犠牲者、道具となってしまった男」ではないし、『ジュスティーヌ』の「おぞましい行為の数々」を犯すこともない。オクターヴもその創造者も真のサディストではない。そして、スタンダールは、フランソワ・チェンチのような真のサディスト的ドン・ジュアンとモーツアルトのドン・ジュアンを区別していた。

われわれにモーツアルトのドン・ジュアンを許容させる、真の優しさ、魅力的な陽気さの瞬間、そのような瞬間を誰もチェンチの中に見たものはない[27]。

『アルマンス』の作者にも主人公にも「真のやさしさ、魅力的な陽気さの瞬間」が存在した。そしてスタンダールの理想はモーツアルト的ドン・ジュアンだった。

女たちの誘惑者たらんと心に決めて私はパリに着いた。今ならドン・ジュアン（モーツアルトのオペラの）と呼ぶところだ[28]。

恋人に裏切られて恨みに思い、しかしそれでも愛し続けるオクターヴは、モーツアルト的ドン・ジュアンである。それゆえ、「モーツアルトの『ドン・ジュアン』のかくも暗い和音」は絶望する彼に「心の平安」（70）をもたらし、一方「陰鬱なアルフィエリ」、真のドン・ジュアンは、彼にとって「煩わし」（68）いものとなる。彼は「優しい魂」[29]の一人である。

しかし、作者が報われぬ恋に苦しみ、そのサディスト的傾向がウェルテル的傾向に勝るとき、モーツアルト的ドン・ジュアンたることを忘れ、主人公は真のドン・ジュアン、真のサディストに近づく。

スタンダールは貴族のドン・ジュアンについて次のように書いている。

身分上女性を追いかける人々の大半は、極めて裕福な家に生れている。つまり、その受けた教育と若いときに周囲に見たものの模倣によって、利己主義者で心が干からびている[30]。

スタンダールの生家はサドのように「極めて裕福な家」ではないし、彼が「受けた教育」も「若いときに周囲に見たもの」もサドとは異なる。スタンダールは多くの点でサドとは異質の作家である。しかし、「啓蒙主義の極端な一傾向の啓示者」[31] サドは、スタンダールの「極端な」そしてときに無意識の「一傾向」の「啓示者」であったと私には思われる。

追記

生前の御厚情に対する感謝のしるしとして、急逝された石井芙桑雄先生の御霊にこの論文を捧げます。

注

1）Stendhal, *Armance*, éd. Jean-Jacques Labia, GF-Flammarion, 1994, p. 259. 以下『アルマンス』の引用は全てこの版により、本文中に頁数を記す。

2）*Ibid.*, p. 40.

3）「ああ、わが友よ！悪徳の栄え la prospérité du crime は雷のようなものだ。その偽りの光は一瞬大気を美しく照らすが、それはただ、その光に目の眩んだ不幸な者を死の深淵に突き落とすためなのだ」（Sade, *Justine ou les Malheurs de la vertu*, dans *Sade Œuvres*, t.II, éd. Michel Delon, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1995, p. 123）。以下『ジュスティーヌ』の引用は全てこの版により、本文中に頁数を記す。

4）Philippe Berthier, dans *Stendhal Œuvres romanesques complètes,* t.I, éd. Philippe Berthier et Yves Ansel, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 2005, p.874.

5）オクターヴのナルシシズムについては、Hans Boll Johansen, *Stendhal et le roman. Essai sur la structure du roman stendhalien*, Aran（Suisse）, Editions du Grand Chêne, 1979, p. 102 を参照。

6）Michel Crouzet, *Le roman stendhalien. « La Chartreuse de Parme »*, Orléans, Paradigme, « Modernités », 1996, p. 169.

7）Philippe Berthier, *Stendhal et la sainte famille,* Genève, 1983, p. 209.

8）Michel Crouzet, « Pour une lecture d'*Armance* », dans *Stendhal,* Robert Laffont, coll. Bouquins, 1980, p. 814.

9）*Ibid.*p. 813.

10）Gilbert D. Chaitin もオクターヴと侯爵の決闘は「無意味 senseless」であり、オクターヴは「全く良心の呵責なく without the slightest compunction 侯爵を殺した」としている。Voir Gilbert D. Chaitin, *The Unhappy Few*, Bloomington and London, Indiana University Presse, 1972, p. 20 : «[...] Octave has fougt a senseless duel with the Marquis de Crêveroche, killed him without the sligtest compunction[...]».

11）Geroges Blin, dans son Introduction à *Armance*, éd. Georges Blin, Editions de la Revue Fontaine, 1946, pp.XXXI-XXXII.

12）Stendhal, *De l'Amour*, Gallimard, coll. Folio, 1980, p. 29.

13）*Ibid.,* p. 88-89.

14）この『ラミエル』の場面については、Philippe Berthier, *Stendhal et la sainte famille*, Genève, Droz, 1983, p.208 を参照。ベルティエは『ラミエル』をスタンダールの最もサディスト的テクストとみなしているが、作品全体としても、私は『アルマンス』の方が『ラミエル』よりサディスト的だと考える。

15）「顔の蒼さを除いて」と鳥の存在については、Jean Bellemin-Noël, *L'auteur encombrant : Stendhal.* Armance, Presses Universitaires de Lille, 1985, pp. 11-12 を参照。

16）サドは「décharger」を使うことが多いが、「se pâmer」も使用している。Sade, *La nouvelle Justine ou les malheurs de la vertu*, dans Œuvres, t.II, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1995, p. 894 等。

17）Sade, *La nouvelle Justine ou les malheurs de la vertu*, dans Œuvres, t.II, Gallimard, Bibliothèque de

la Pléiade, 1995, p. 678.

18）*Ibid.,* p. 679.

19）*Ibid.,* p. 714.

20）Gilbert D. Chaitin, *The Unhappy Few,* Bloomington and London, Indiana University Presse, 1972, p. 11.

21）*Ibid.,* p. 36.

22）*Dictionnaire de Stendhal*, éd. Yves Ansel, Philippe Berthier et Michael Nerlich, Honoré Champion, 2003, p. 643.

23）Béatrice Didier, *Stendhal*, éd.Ellipses, 2000, p. 35.

24）Stendhal, *De l'Amour*, Gallimard, coll. Folio, pp. 237-238.

25）*Ibid.,* p. 238.

26）*Ibid.,* p. 236

27）Stendhal, *Les Cenci,* dans *Chroniques italiennes,* éd. Béatrice Didier, Paris, Garnier-Flammarion, 1977, p. 244.

28）Stendhal, *Vie de Henry Brulard*, dans *Œuvres intimes,* t.II, éd. Victor Del Litto, Gallimard, coll. Bibliothèque de la Pléiade, 1982, p. 870.

29）Stendhal, *De l'Amour*, Gallimard, coll. Folio, pp. 236.

30）*Ibid.*

31）Jean Deprun, *Sade philosophe*, dans Œuvres, t.II, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1995, p. LXIX.

（本学文学部教授）